



# 帆樯成林

—はんしゅうせいりん—

新潟市歴史博物館 博物館ニュース vol.50

「帆樯成林」とは？

帆柱が林のように多く立つ様子を表した語。  
人が多く出入りする活気ある「みなと」をイメージしました。

## CONTENTS

特集1	『帆樯成林』第50号刊行記念 博物館ニュースのこれから	P.2~3
特集2	むかしのくらし展「にいがたの昭和」	P.4
歴史さんぽ	新川	P.5
おすすめの一冊	『雑兵たちの戦場 中世の傭兵と奴隷狩り』	P.5
研究notes(第36回)	近世新潟町の船大工と船作事	P.6
館長日記	資料は語る	P.7
収蔵資料紹介	五十嵐俊明「猿図」	P.7

■ 帆樯成林「はんしゅうせいりん」第50号  
■ 編集・発行／新潟市歴史博物館 〒951-8013 新潟市中央区柳島町2-10  
■ 印刷／株式会社ウエッパ

## 【たいけんのひろばプログラム】

楽しみながら、遊びながら、  
昔のことを学びます。

日時	タイトル	内容	申込み・対象・参加費
9月19日(土)・20日(日) 14:00~15:00	さらさら砂絵	新潟の砂を使って、砂絵をつくります。	どなたでも・申込み不要・ 当日先着8人(各日)・無料
10月18日(日) 14:00~15:00	150年前の にいがたを探そう	白山公園界隈を探検し、明治時代初めころの古写真を手がかりにして、 150年前の痕跡を探します。	小学生対象・申し込み先着10名(保護者の 付き添い可)・無料 ※雨天中止
10月24日(土)・25日(日) 14:00~15:00	みなとびあクイズラリー ～みなとびあ博士になろう～	みなとびあ敷地各所に設置されている12問のクイズに答えて、みなと びあ博士になろう!	どなたでも・申込み不要・ 当日受付(各日)・無料 ※雨天中止

お申込みは、電子メール・往復はがきで当館まで。申込み締切日は、当館までお問い合わせください。

## 現在開催中の企画展

### むかしのくらし展「にいがたの昭和」

会期 2020年9月12日(土)～2020年11月3日(火祝)

休館日 毎週月曜日(9月21日は開館)

観覧料 無料

主催 新潟市歴史博物館

■ 展示解説会	日時: 毎週日曜日 各回14時～(1時間程度)	■ 昭和のむかしのあそび体験	日時: 2020年9月26日(土)・27日(日)・ 10月3日(土)・4日(日)
	会場: 本館1階企画展示室 申し込み: 不要 ※当日観覧券が必要		会場: 本館1階たいけんのひろば 内容: ペーゴマ、メンコ、ビー玉、おはじき、 お手玉など昭和の子どもたちが遊んだ 素朴な遊びに挑戦します。 申し込み: 不要、時間までに会場へお集まりください 参加費: 無料

## 博物館講座

当館学芸員が調査・研究をすすめているテーマについて、  
毎月第4日曜日にお話します。

【時間】 13:30～15:00  
【会場】 本館2階セミナー室  
【申込】 要事前申込み 40名  
【資料代】 100円

- ◆ 9月の講座: 9月27日(日) 申し込み受付開始日: 9月9日  
「蒲原郡の「関ヶ原合戦」」  
講師: 田嶋悠佑
- ◆ 10月の講座: 10月25日(日) 申し込み受付開始日: 10月7日  
「地図にない湖」を地図でたどる  
講師: 森行人
- ◆ 11月の講座: 11月22日(日) 申し込み受付開始日: 11月5日  
「民俗芸能の近代」  
講師: 渡邊久美子

## 次回企画展

### 「生誕320年 五十嵐俊明」展

五十嵐俊明は、新潟湊に生まれた江戸時代中期の絵師です。新潟で後進育成に尽力しながら、書や漢詩にも優れた教養をもって関西の文化人と対等につきあい、晩年には勅命を得て天皇に画を献上する栄誉も得ました。江戸後期に活躍する地方絵師たちの先駆的な存在であり、新潟の美術史を語る上で欠くことのできない人物です。俊明生誕320年を記念した本展覧会では、新潟で大切にされてきた作品に加え、関西とのつながりを示す作品などを広く集めてご紹介いたします。

会期 2020年11月14日(土)～2020年12月27日(日) 休館日 毎週月曜日(11月23日は開館)、11月24日(火)

## みなとびあ便り

新型コロナウイルスの影響下、新たに誕生したものがあります。その中のひとつをご紹介します。

みなとびあで最大のダメージは、当館の売り「体験のひろば」です。様々な昔の道具を実際にさわり、かつぎ、身に着け、使って学ぶ場です。パソコンでの「にいがたの昔がいつべ」も使えなくなりました(ホームページ上では楽しめます)。そこで、当館の教育普及担当学芸員は、黙っちゃいません。体験のひろばを「見て学べる展示広場」にリニューアルしました。さらに、見学に来てくれた子どもたちが自分で興味の対象を発見できるよう、常設展示のクイズも用意しました。“学び”を楽しめるみなとびあへ、是非遊びに来てください。  
新シリーズ「みなとびあ便り」では、みなとびあへの押し売り!今!の情報をお伝えしてまいります。(大森)



## 旧小澤家住宅企画展

開館時間: 午前9時30分～午後5時  
休館日: 原則月曜日、祝日の翌日、年末年始  
入館料: 一般200円  
小中学生100円(土・日・祝日は無料)  
■ 新潟仏壇工芸展  
会期: 10月17日(土)～11月8日(日)  
■ ボランティア企画「新潟の新聞」展  
会期: 11月14日(土)～12月13日(日)  
TEL: 025-222-0300

編集後記 今回で第50号となり、表紙など少しリニューアルしてみました。特集では、『帆樯成林』のこれらについて取り上げてみましたが、編集者としては毎号どのようなことを特集するか悩むどころです。もし、読者のみなさんのなかで取り上げてほしいテーマなどありましたら教えていただければ幸いです。少しでも多くの方の手にとってもらえるように今後も様々な工夫を行っていかれたらと思います。(鈴木)

## ■お問い合わせ・申込みは博物館まで…

新潟市歴史博物館 みなとびあ  
住所: 〒951-8013 新潟市中央区柳島町2-10  
Tel: 025-225-6111 Fax: 025-225-6130  
E-mail: museum@nchm.jp http://www.nchm.jp  
【休館日】 毎週月曜日、祝日の翌日・年末年始(12/28～1/3)  
【開館時間】 (4-9月) 9:30～18:00 / (10-3月) 9:30～17:00



2020. 8 現在

みなとびあ歴史発見プロジェクトは、こどもからおとなまで幅広く、みなとまち新潟の歴史に親しみ、自ら歴史を発見する喜びを知ってもらい、開港150周年を迎えた新潟の街をみんなで盛り上げていこう!という事業です。

「みなとびあ歴史発見プロジェクト」は、下記の地域の企業・団体のみなさんからご協賛をいただいています。

NST 日和山五合目
 北陸ガス
 NSGグループ
 Hummingbird
 本間組
 田中屋本店
 堀川
 新潟 たいけん



新潟西港点描・みなとびあ本館屋上から撮影  
グラブ式浚深船での浚深工事は夏の風物詩

# 『帆船成林』第五〇号刊行記念 博物館ニュースのこれから

鈴木彩也花

皆さんが手に取っている博物館ニュース「帆船成林」は、開館した平成一六（二〇〇四）年に第一号が発行され、今号をもって五〇号になりました。本誌は、年に三回刊行しているもので、企画展や館のイベントを特集するほか、収蔵品の紹介や新潟市内の歴史を紹介する「歴史散歩」、学芸員がおすすめる本の紹介、館長が近況を綴った「館長日記」などのシリーズを掲載しています。

今回は五〇号を記念して、「帆船成林」のこれまでの意義を改めて考えてみることに、これからのあり方について考えてみたいと思います。

## 意義について

みなさんは、「帆船成林」という言葉の意味をご存知でしょうか。毎号表紙にも記載していますが、「帆船成林」とは帆柱が林のように多く立つ様子を表した語です。この言葉には、みなとびあが多くの船で賑わう港のように活気ある場になるようにとの願いが込められています。みなとびあが多くの人で賑わってもらうには、どんな場所か、どんなイベントを行っているかを市民に知ってもらうことが重要になってきます。

そして、その情報発信の一端を担うのがこの「帆船成林」です。特に、冒頭の特集ページでは、館の活動について重点

的に紹介しています。これをきっかけに市民の方に博物館の役割や必要性を少しでも感じてもらうことができればと考えています。

## 発信方法について

「帆船成林」は、館内で配布しているほか、ホームページでも公開しています。最近では、博物館ニュースを電子媒体でしか公開していない館も増えてきているように思います。確かに、電子媒体の方が費用を削減できるという利点があります。しかし、当館では館の利用者の中には電子媒体の利用の少ない高齢者も多いということも踏まえ、今後も紙媒体での発信も続けていきたいと思っています。電子媒体と紙媒体の両方で発信していくことにより、幅広い世代に読んでもらえるのではないかと期待しています。

また、最新号を手に入れるために来館してくださる方がいらつしゃいます。ここから、紙媒体での配布が少なからず来館の動機となっているのではないかなにかと思います。是非、コレクションのような感覚で毎号手に取っていただくと嬉しいですね。

## 内容について

開館当時から発行している「帆船成林」ですが、シリーズのテーマが変わって

ることはご存知でしょうか。例えば、第一号から第三〇号まで、常設展示の内容を紹介する「常設展示から」というシリーズがありました。第三一号からは「歴史散歩」に変更しています。また、みなとびあで働く人をピックアップして紹介した「みなとびあの人・人」も同時期に館内や敷地の中で一つの場所をピックアップして紹介する「博物館あちらこちら」に変えています。このように、定期的にシリーズのテーマを変更することで、読者に様々な角度から博物館や新潟市の歴史について知ってもらえたらと思っています。

そして、今号から「博物館あちらこちら」を変更して「みなとびあ便り」という新しいシリーズが始まります。ここでは、学芸員以外の職員も執筆者となり、最近の館での出来事をミニ日記の形式で書いていこうと思っています。また、今号から博物館の情報だけではなく、旧小澤家住宅のイベントの情報も掲載します。みなとびあから歩いて十二分ほどの場所にありますので、本館と合わせて見学してみてください。

## これからの『帆船成林』

今回、五〇号という節目にあたり、「帆船成林」について取り上げてみました。実際、本誌がどれだけの人に読んでいた

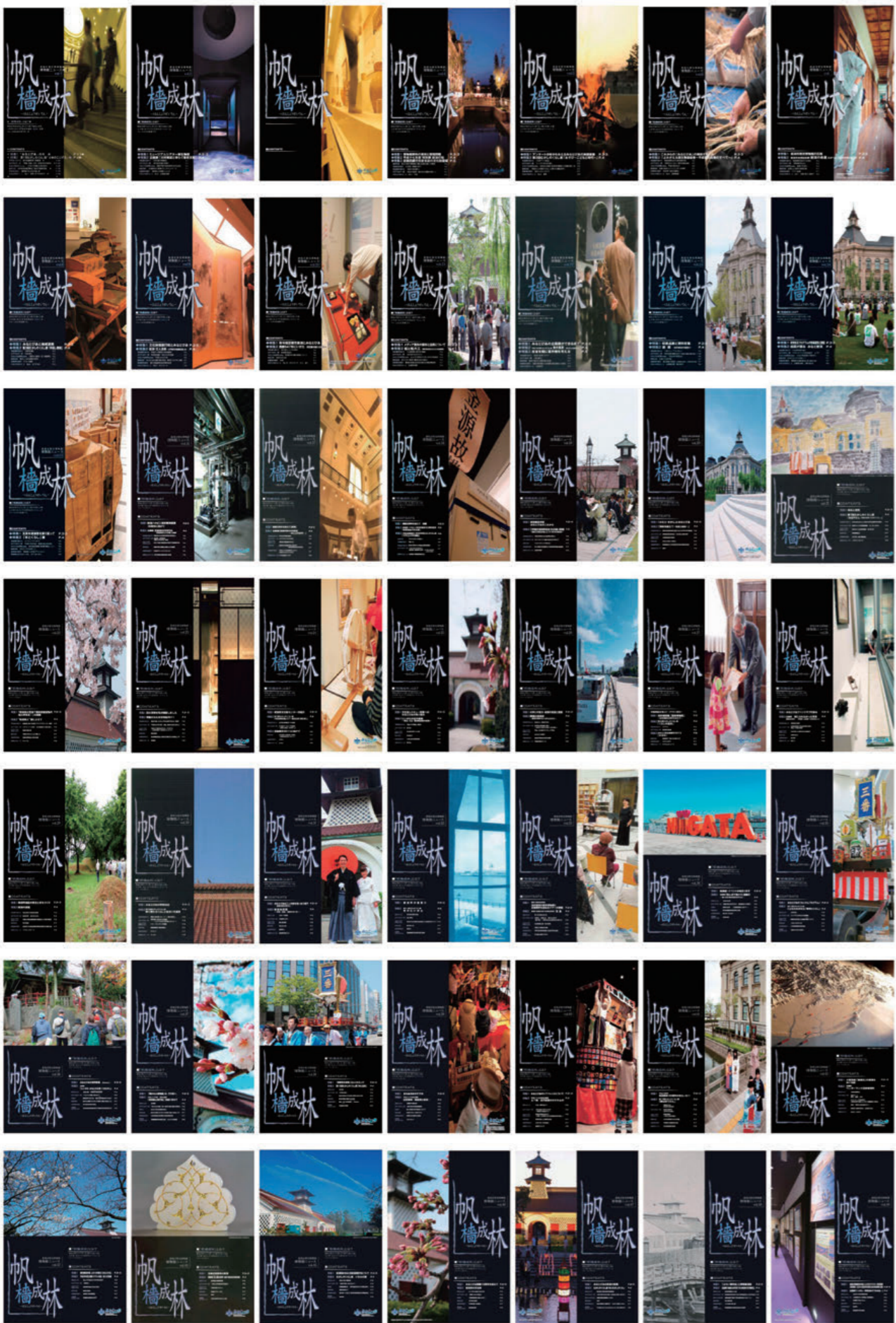
だいているかはわかりませんが、毎号読んだ感想をハガキに書いて送ってくださる方がいます。大変有難く、職員全員で読ませていただいております。ここでは、記事の感想だけではなく、「文字が小さかった」「ふりがなを振ってほしい」といったご意見をいただくこともあります。今後の課題として、読者にとって読みやすいものか、興味をもっていただける内容かなどを吟味し、多くの方に手に取って読んでいただけるような工夫を行っていききたいと思います。

更に、今号から表紙のデザインを変えてみました。以前の表紙の雰囲気を残しつつ、港の爽やかな雰囲気を追加しています。いかがでしょうか。デザインなどの視覚的情報にも今後は力を入れていきたいと思っています。

そして、現在新型コロナウイルス感染症拡大を受け、博物館の来館者が減少しています。加えて、オンライン化が進行し、わざわざ出かけるなくても情報を得ることができるようになってきています。このような中で、情報発信の充実を図る一方で、博物館へ足を運んでこそその楽しみ方を発信していくことも今後「帆船成林」の新たな役割の一つになってくるのではないかなと思います。

（すずき さやか 学芸員）

『帆船成林』第1号～49号表紙



昭和は日本が大きく変化した時代です。大きな戦争が起こり、人々は貧しく苦しい生活に耐え、戦争後は勤勉に働き日本を豊かにしました。工業が盛んになり、若者は農村を離れて街で働き暮らすようになり、都市は巨大になっていきました。人々の暮らしも変化し、多くの道具が電化製品に代わり、自動車での移動があたり前になりました。そして公害など今にいたる環境問題の多くが昭和に始まっています。

子どもたちにとって昭和は、もはや遠い過去の歴史です。一方、親・祖父母の世代にとっては懐かしさを感じながら、まだその時代感覚の中で暮らしている人も多いでしょう。

今回の「むかしのくらし展」では、昭和の世界を子どもたちに伝えることを目的に、昭和の新潟市をふり返ります。それは、親や祖父母世代の幼少期・青春期の暮らしを伝えることにつながります。ただ、昭和という時代は長くバラエティに富んでいることから、すべてを伝えることは困難です。そのため、子どもの視点を意識しながら伝える項目を絞りました。

まず一つの項目は「戦争」。昭和二十（一九四五）年の終戦から今年で

七五年が過ぎました。戦時中、小学校の児童は「少国民」と呼ばれ、子どもたちは幼い戦力、将来の兵士として育てられました。その状況を伝える当時の教材などを紹介します。また、新潟市にもアメリカの爆撃機B29が飛来し、船が触れると爆発する機雷を港に落としていきました。その一機が新潟市内に墜落しており、その残片を展示します。

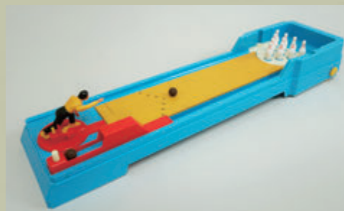
二つめは「くらしの道具」。電化製品が家庭で普通に使えるようになったのも昭和、なかでも戦後の特徴です。それにより生活スタイルも変わりました。昭和三十年代に「三種の神器」と呼ばれたテレビ・電気冷蔵庫・電気洗濯機をはじめ、昭和期の電化製品を紹介します。



白黒テレビ

三つめは「子どもの遊び」。やんちゃな子どもたちが自分たちで工夫しながら遊ぶものから、電気で動くおもちゃやテレビゲームへと変わってきたのも昭和です。昭和初期のおもちゃの

ほか、三十年代の「だっこちゃん」、四十年代の野球盤やボウリングゲーム、五十年代末に登場したファミコンなど広く知られたおもちゃを展示します。



ボウリングゲーム

そして「新潟の昭和史」。これは昭和に起こった新潟市の事件・出来事を一〇項目に絞り込んで紹介します。子どもたちと同じように歴史としての視点に立って情報を伝えられるよう、昭和時代の記憶がない平成生まれの学芸員が一〇項目を選び解説することになりました。その中には昭和十二年の万代百貨店・小林百貨店の二つのデパートの開業があります。二店とも近年閉店したばかりです。昭和から今に移り変わる時



昭和30年代の中央区碓谷小路

代の変化を感じ取とれる出来事ではないでしょうか。そのほか、市民が所有する昭和のコレクションを展示します。これは子ども世代ではなく昭和世代に楽しんでもらうものです。こんなものがあった！。青春時代を思い出してはいかがでしょうか。

昭和時代を振り返ってみると、私たち日本人は多くのことを学びました。戦争がもたらす悲惨さ、勤勉による豊かさや文化的な生活の獲得、それを得るために犠牲にした自然環境からの逆襲など。こうした昭和という時代の明と暗の部分、ご自分の経験から子どもたちに伝えてあげてはいかがでしょうか。現在の厳しい状況のなか、これからの困難に立ち向かい、未来を目指そうと昭和に学ぶことは多いと思います。みなとびあがそうした場になれば幸いです。

本展の会期は十一月三日まで。観覧無料です。ご家族そろってのご来館をお待ちしています。

(こばやし たかゆき 副館長)

おすすめの1冊

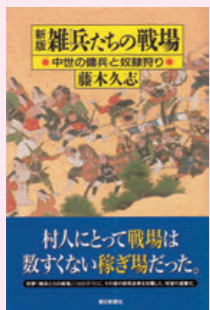
『雑兵たちの戦場 中世の傭兵と奴隷狩り』(新装版)

昨年九月、新潟県出身の歴史研究者藤木久志氏が亡くなりました。藤木氏は戦国大名研究や、歴史上の日常生活や習俗など社会史と呼ばれる分野の研究でも知られています。

本書も社会史の研究成果をまとめた本の一冊で、戦国時代に戦闘要員やその補助要員として流れ込んだ「雑兵」たちに焦点を当て、雑兵の登場の背景、戦場での人物の略奪の実態についてまとめています。また、戦争状態から村の住民を守るために築かれた「村の城」の利用など戦国時代の実像に迫っています。

「戦場の雑兵たち」節中の、上杉謙信が領民の口減らしのために関東へ出兵し、戦場で人身売買を容認したという記述は殊に有名です。今日では反論も出ている記述ですが、新潟県出身で上杉家の研究も行った藤木氏があえて問題を提起したことについて、我々が受けとめ、考えるべき点もあるように思います。

(田嶋 悠佑 学芸員)



藤木久志 著  
朝日新聞社 発行  
2005年6月

歴史さんぽ 新川

新潟市西蒲区・西区

新川は今年通水200周年を迎えました。新川は内陸にたまった水を排水して水害を防ぎ、新しい水田を拓くために、江戸時代に開削された放水路です。越後平野ではこうした放水路が江戸時代から現代まで数多く開削されました。その河口は20カ所に及びます。新川は大正6（1917）年に河川法準用河川となり、この時点で早通川の流路を含む鎧潟から海までの流路が新川となりました。現在の新川水系は燕市から西蒲区を経て、西区で海に注ぐ二級河川として、今も流域の排水において重要な役割を担っています。

新川の沿川には、多くの排水機場があります。低湿な地域の多かった西蒲原地域では、明治中期以降各地で機械排水が導入されていきます。大正末期以降は機械排水が普及し、昭和20年代以降は国の事業によって、新川水系に新川右岸排水機場をはじめとする大型の排水機場が建設されていきます。この事業は湿田の乾田化を目指して新川流域の用排水を整備するもので、新川に排水を集中させる計画でした。そのため、大量の水を流下させられるように新川の改修も進められました。

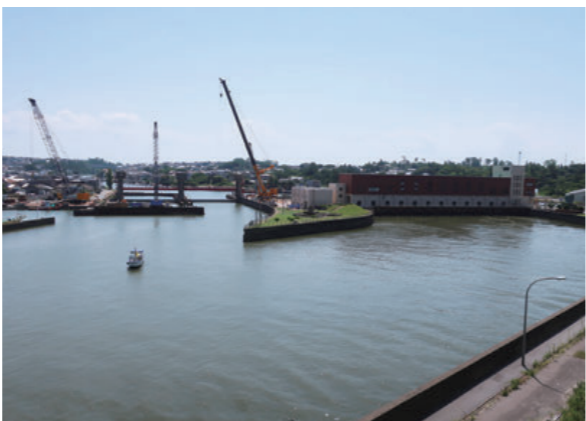
また、戦後の新潟では資源不足の中、地下の水溶性天然ガスが燃料として盛んに利用されました。この天然ガスの採取を目的として地下水が大量に

汲み上げられたため、各地で地盤沈下が発生しました。新川流域でも地盤沈下により排水不良等の問題が発生し、この対策として新川河口排水機場を建設し、新川流域の排水機場の運転を遠隔制御できるようにしました。新川河口排水機場の建設とこれに伴う新川漁港の整備は、新川河口の景観を大きく変化させました。なお、現在の新川河口の様子は、内野新川大橋から一望することができます。

昭和40年ごろから、西区内野周辺で市街地が広がっていきます。昭和50年代になると住宅地の増大や開発の進行により、雨水の水路流出による湛水被害が発生するようになります。農地の水害を防ぐとともに都市水害の予防が必要となったことから、新川水系と周辺の水系に放水路や排水機場を整備して西蒲原全体の排水系を分散させ、新川への排水集中を緩和させました。

河川として整備を重ねてきた新川の歩みから、地域の環境と社会の歴史的な変化が見えてきます。

森 行人 (もり ゆきひと 学芸員)



内野新川大橋から見た新川河口

# 近世新潟町の船大工と船作事

新潟町には、例えば天保十四年(一八四三)の場合、町民所有の廻船が五四艘、はしけ船が四三艘、天渡船が四二艘、他に大小の川船がおよそ四〇〇艘近くありました。こうした町内をはじめとした船の建造や修復を産業としていたのが船大工でした。小稿では彼ら船大工とその作事のあり方を史料からみていきたいと思います。

◆◆◆  
天保十四年の「新潟市中風俗書」(川村家文書)所収、当館蔵)によると、船大工は上の町・横町・大川前通りに居住し河岸に「船蔵」という「細工場」を建てて海船・川船の作事を引き受けていたそうです。彼ら船大工の手間は家大工同様だったようですが、町外の仕事の場合、依頼主との交渉次第で手間は上下したようです。この頃、船大工仲間数は二五人とされていますが、ただこの人数だけでは町全体の船に対応できるとは考えにくく、加えて元治元年(一八六四)の職業調べに船大工軒数として一五一軒が数えられています。このため、この二五人は船大工のなかで棟梁的な存在であったのではないかと考えています。ちなみに川村修就在任期間と思われる町の長者調べ「新潟物持名前書」(川村家文書)所収)には上位一四名以内「二万」のグループに下浜町居住の船大工・小島屋治郎右衛門の名が見られ、富裕者もいたことが確認できます。

なお新潟町の場合、船大工と家大工は別種として存在していましたが、その職分をおかし家作りを行ってしまう船大工もいたため、文化十三年(一八一六)には家大工がこれを訴えています。また文政五年(一八二二)、船大工たちは近

年「古法」が破られているとして「船大工規定書」(新潟町会所文書)所収、当館蔵)を取り決めています。この規定書は船大工の相互扶助を目的としたもので、例えば葬式や普請、臨時の人足が必要な際の手伝いをする、仲間内で手透きの人がいるにも拘らず他方の職人を雇うことを禁ずることを定めています。

◆◆◆  
さて、長谷川雪且の「北国一覽写」には町中の堀に面した小屋で小型の船作事が行われている様子がスケッチされています。ただ大型の廻船を積み入った町中で作事し、それを川まで運んで降ろすことは容易だったとは思えません。それでは大きな船はどこで作事していたのでしょうか。  
年不詳ですが、図は上島・下島近辺において廻船の作事が行われていたことを示すものです。各船の付近に「賄小屋」を建てて作業していたことや船を揚降するための諸道具が格納されていたとみられる「轆轤屋」が近くにあったこと等が分かります。建造や修復が終わった船はすぐ目の前の信濃川へ降ろされたでしょう。また詳しい経緯は分かりませんが、新潟町では廻船の作事を行う大工・木挽・人足の食糧米を運搬する際に掛かる役銀等の免除制度があったようです。これに関する史料をまとめた

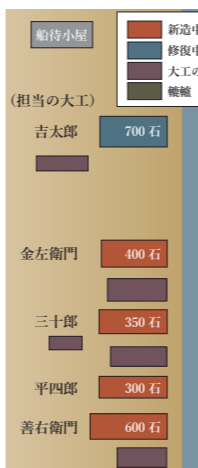


図 上島・下島付近

のが表です。史料はいずれも慶応三年(一八六七)のもので、ここから同町では町外・越後国外船主の船も作事していたことや右の免除申請を廻船問屋が行っていたこと等が分かります。  
ところで左図には人名が記されています。これらの人は各船の作事を行う船大工の棟梁的存在と考えますが、例えばこのうちの「吉太郎」は船大工・小島屋吉太郎と思われる。「小池上家文書」(当館蔵)には彼が建造を引き受けた廻船「神力丸」に関する史料がいくつか残っています。神力丸は新潟町の廻船主・小熊屋(小池上)春五郎が建造を依頼した船です。船の姿は慶応元年(一八六五)八月に胎内荒川神社に奉納された船絵馬(重要有形民俗文化財)によって知ることができ、一八反帆七人乗で船頭は重太郎という人だったようです。この神力丸の建造諸費用については同年の「神力丸船代勘定帳」(「小池上家文書」所収)に詳しく記されています。同史料によれば船体の代金は約四八四両で、「道具」類は新品(約九八両)だけでなく「古道具」(約一〇〇両)もあったことが分かります。また碇は「道具」類には含まれず、別に費目が立てられ、「下ノ関二而新碇買入代金」として約一八両が計上されています。神力丸はこうした諸費を合わせて総額約七九〇

の表です。史料はいずれも慶応三年(一八六七)のもので、ここから同町では町外・越後国外船主の船も作事していたことや右の免除申請を廻船問屋が行っていたこと等が分かります。  
ところで左図には人名が記されています。これらの人は各船の作事を行う船大工の棟梁的存在と考えますが、例えばこのうちの「吉太郎」は船大工・小島屋吉太郎と思われる。「小池上家文書」(当館蔵)には彼が建造を引き受けた廻船「神力丸」に関する史料がいくつか残っています。神力丸は新潟町の廻船主・小熊屋(小池上)春五郎が建造を依頼した船です。船の姿は慶応元年(一八六五)八月に胎内荒川神社に奉納された船絵馬(重要有形民俗文化財)によって知ることができ、一八反帆七人乗で船頭は重太郎という人だったようです。この神力丸の建造諸費用については同年の「神力丸船代勘定帳」(「小池上家文書」所収)に詳しく記されています。同史料によれば船体の代金は約四八四両で、「道具」類は新品(約九八両)だけでなく「古道具」(約一〇〇両)もあったことが分かります。また碇は「道具」類には含まれず、別に費目が立てられ、「下ノ関二而新碇買入代金」として約一八両が計上されています。神力丸はこうした諸費を合わせて総額約七九〇

表 慶應3年の廻船新造・修復

史料月日	日数	作事種類	作事場所	船の規模	船大工	大工・木挽等のべ人数	船主・船頭等	願人(廻船問屋)
1月	45日間	新規合船	下島	250石/5人乗	-	850人	新潟町・前田屋八十兵衛	前田屋松太郎
2月1日	-	新規合船	下島	300石	-	1000人	新潟町・越前屋太兵衛	越前屋太兵衛
2月5日	35日間	下廻り作事	-	500石/7人乗	藤蔵	750人	庄内加茂浦・善五郎、沖船頭・庄蔵	津軽屋次郎左衛門
2月5日	-	新規合船	上島	不明(19反帆)	喜三郎	2800人	越後太郎太夫浜・小熊屋幸次郎	村田吉左衛門
4月8日	21日間	上廻り新造大作事	下島	1000石/12人乗	-	1300人	隠岐布施・能登屋熊右衛門、沖船頭・藤左衛門	前田屋松太郎

出典：上から新潟町会所文書1092・1085・1093・1094・442

両でした。このように船を手に入れるには船体代以外にも多額の費用がかかったようです。  
◆◆◆  
町に残された船大工に関する史料はあまりありません。このため今後は特に他所の船主が町の船大工に依頼した作事に関する史料を丹念に探していく必要があると見られます。  
(安宅 俊介 学芸員)

◆◆◆  
「参考文献」『新潟市史』通史編1、1995

## 資料は語る

「潟のくらし展」は好評のうちに閉幕しました。開館以来の当館の調査研究や展示と潟環境研究所の成果を踏まえた、現状での到達点の一つの展示ができたと思えます。

展示された絵図や漁具などをみて、改めて資料を集めること、研究調査すること、展示活用することの大切さを確認しました。低湿地で人々が作り、使い、伝えてきた資料が、人々の暮らしを語り、暮らし続けた地域の自然環境・社会環境を教えてくれるのです。

たとえば、エントランスのキッツォは、蒲原平野に独特の農具です。全国の低湿地で用いられるタブネは、箱型カソリ型ですが、キッツォはまさしく舟です。弥生時代の遺跡からは丸木舟形のタブネが出土するそうです。他地域ではより簡素な形態で製作しやすいタブネになったのに、蒲原ではなぜキッツォの名で舟型で残ったのでしょうか。蒲原では箱型やソリ型では不便だったのでしょうか。あるいは多くの船大工が各地にいたことがその理由でしょうか。展

示された蒲原各地で採取されたキッツォは、その開きや大きさなどが地域によって異なっています。私が聞きかじっただけでも、ヤチキリガマや手回し脱穀機など、近代にいたっても、工業製品になっても、蒲原地域に独特な農具の作成・使用・展開があったそうです。紙に書き記されることない、人々が地域環境の中で培ってきた知見や技術に基づいて、農具は作られ、使われてきたのです。記録されていない人々と暮らしと環境について調べ、考え、知り、そして、これからの暮らしや社会、環境の維持に活かすためには、残された民具や古文書などの資料を収集、調査する必要があるのです。過去の民具や古文書は失われることはあっても、増えることはないので、すから。



エントランスに並べられたキッツォ

## 収蔵資料紹介

### 猿図 五十嵐俊明 宝暦八(一七五八)年

やけに細長く、茶一色といった軸に近づいていくと、意外にもかわいらしい猿が三匹、だんごのように連なっているのが見えてきます。一般的な掛軸とほぼ同じ長さですが、幅は一四センチしかありません。ニホンザルとは異なり手が長く丸顔の猿の絵は、牧猿とも呼ばれます。室町時代に人気だった中国の画僧牧谿が描いたものがよく知られたからです。  
猿たちは、みな何かを指さしています。手前の二匹は下を、奥の一匹は腕を伸ばして上を。どんな意味があるのでしょうか。

下へ手を伸ばす猿の姿は、しばしば絵に描かれました。それは、仏教の「猿猴捉月(取月)」という、ブツダが僧たちを戒めた際のたとえ話をテーマにしています。五〇〇匹の猿が、樹の枝をつかみ、それぞれの尾をつかんで連なり、なんとか水中に見える月を取ろうとして、枝が折れ溺れ死んでしまう話です。欲にかられて無謀な行動をとると失敗する、ということわざになっています。



(中村 里那 学芸員)

絵の画面上部には作者による賛があります。「巴峽」という渓谷の、断崖に藤のつるが生い茂り、そこどこから猿が集まってきて、月光の中で鳴きながら「碧天」に落ちると読み取れそうです。「巴峽」は猿が多いことで有名な中国の地で、平安中期の詩集『和漢朗詠集』に、秋の月夜、巴峽に猿の悲しい鳴き声が響くさまを詠んだ漢詩があります。「碧天」は青空のことですが、月が映る水面を青い空と表現したのでしょうか。いずれにせよ、やはり「猿猴捉月」の話が関係していると思われま。

しかしここに描かれた猿たちはそれぞれ上と下を指さし、水中の月は上空の月が映ったものだと知っているぞ、とでもいうようです。少し得意げにさえ見えています。  
この絵は、江戸中期、新潟の絵師五十嵐俊明によって描かれました。十一月半ばから開催する企画展にて、ホンモノをご覧いただけます。